

現在、パンデミック・新型コロナウイルス感染者の増加によって、現代都市の発展、特に、新しい店舗の内部などを自由に見学する事ができそうにありません。そのような雰囲気蔓延しています。

もしかすると、大工専の在校生の方々には、課題作成や提出が思うように進んでいない方もおられるかも知れません。2年間という短期間で学習し、卒業を目指している皆さんは本当に大変だと思います。

私も在学中に友人たちが中途退学・留年するという厳しい現実を体験しました。とにかく体調を崩さないよう堅実に卒業をめざして下さい。

さて、鴨長明『方丈記』に次のような記述があります。

予、ものの心を知れりしより、四十あまりの春秋をおくれる間に、世の不思議を見ること、ややたびたびになりぬ。

どうやら鴨長明は40代の頃に自分の人生を回想した時、度重なる災害を思い出したようです。しかし、この記述を読んでもみると、私も同じような体験をしている事に気がつきました。

阪神淡路大震災を体験して、大工専を卒業した後に、日本列島の各地で発生した自然災害の被害状況を度々テレビ等で見てきた私自身も、まるで鴨長明の体験談と同じような人生を過ごしているようです。

建築学も建築材料・建設技術も発展を遂げたのに、日本の古典に共感する現実の空しさ。これは一体何だろう？と不思議な憤りを覚えます。

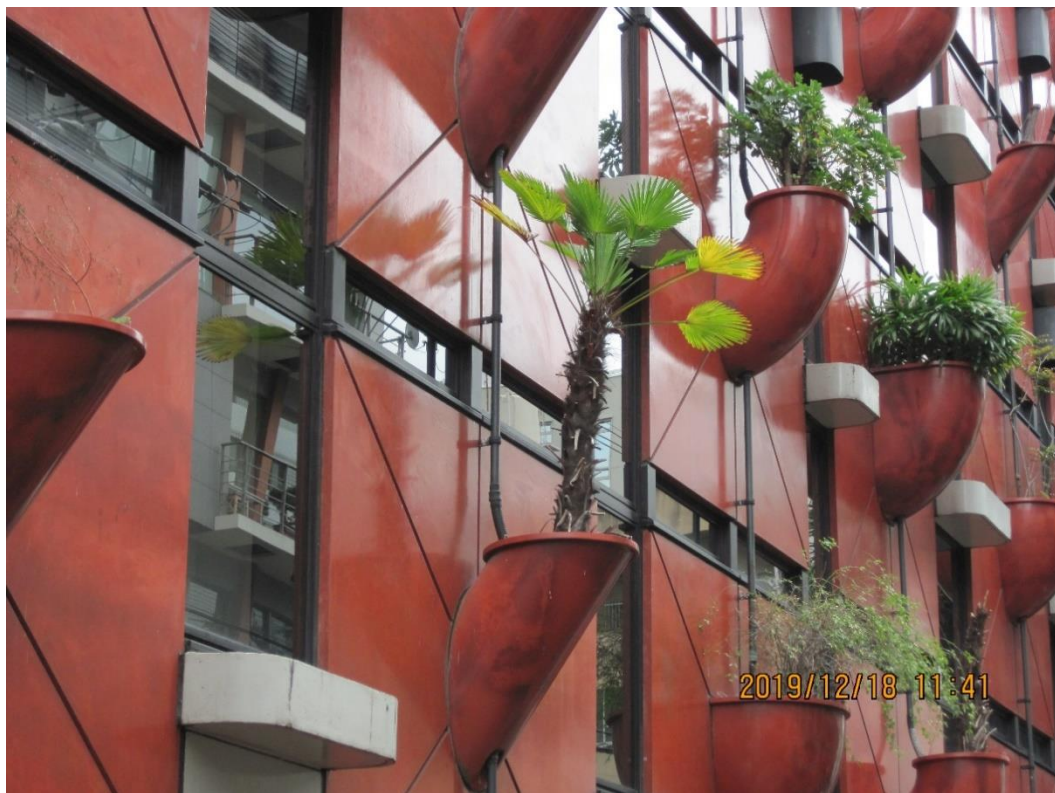
そんな現実から逃れる為に、美しくもあり、ユニークなオーガニックビルをご覧下さい。





エントランス、そしてインパクトの強い外観であるため、隣接する建築物から飛び出すようにエネルギーが感じられます。壁面の植栽には散水用スプリンクラーの送水管と見られる細いチューブが貫通していました。

花鳥風月、まるで巨大な鳥の休憩所のようなですね。しかし、この日は鳥の姿を見ることはありませんでした。…ドラマのような演出に遭遇できず残念です。



定礎は平成五年四月と刻まれています。西暦1993年、阪神淡路大震災の約2年前ですね。そうすると建設された当時、衝撃的なDesignで見学された方々は驚いたのではないのでしょうか？理想の都市に美しい建築物は必要不可欠ですね。



オーガニックビルはインテリアデザインも特徴的で、建設工事の関係者のエネルギーが伝わってきました。この照明器具も、どこで製作されたのでしょうか。搬入して設置するまで緊張感いっぱいですね。

ただし、エントランスホールは照度が低くいので、見学者同士で意見が分かれるかも知れません。それを楽しむのも建築学の醍醐味でしょう。

それでは大阪府大阪市よりクラシカルな建築短歌三十一文字詠ませていただきます。

～ 初夏の風 水の都会を 清らかに

永久に栄へよ あの人人と ～

【参考文献】

武田友宏 編『ビギナーズ・クラシックス方丈記（全）』角川学芸出版